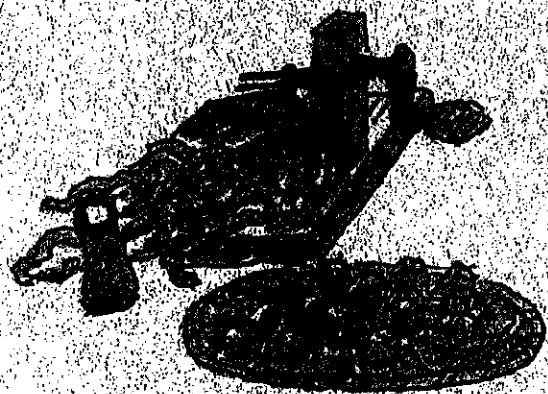
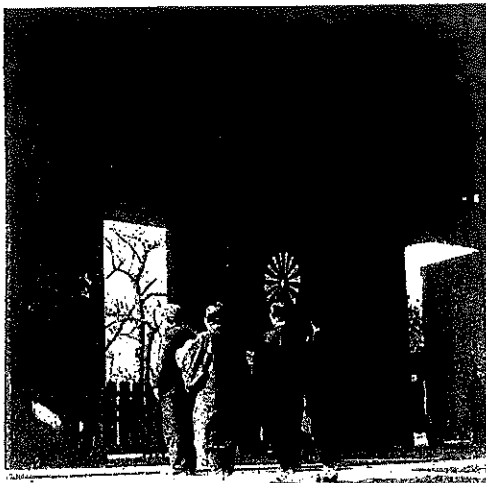


市田柿の

ふるさと

【産地から今までの歴史をたどる】





昭和19年の献上時には、国民学校長、青年学校長と代表3名が上京。激しい空襲にあったという(高森町歴史民俗資料館所蔵)

昭和二十年の市田柿の献上が縁となつて、市田村から久邇官家へ侍女を参殿させるようお召しの電報が届いたこともありました。市田村で協議した結果、大島山の後沢清子を推薦することになり、彼女は、終戦で局制度が廃止になるまで、久邇官家に参殿し子どもの教育係として働きました。



昭和18年の市田柿献上が紹介された東京新聞の記事(高森町歴史民俗資料館所蔵)



昭和18年に山階宮家へ奉献した際、門前にて。左側3人の女性が女子青年会代表、右側2人めが引率の市田村長、関川一実

皇室へ 市田柿を献上

昭和十八年(一九四三)一月、市田村長関川一実と女子青年会の代表三名が上京し、靖国神社、明治神宮、山階宮家などへ市田柿を献上しました。これは「銃後の女性の真心を護国の英霊に示したい」という気持ちの表れとして各新聞に取り上げられ、市田柿の名前を全国に広める一助となりました。記事には、献上された市田柿について「女子青年団員二百五十余名が各自の家々にある柿の木の中の最も秀でた木から数個づつを選びそれを国民学校に持ち寄つて二カ月余りの間丹精をこめて」と書かれています。献上は、昭和十九年(一九四四)、二十年(一九四五)にもそれぞれ行われました。

なぜ、山階宮家へ市田柿を献上したの?

昭和十八年(一九四三)の市田柿献上で、明治神宮、靖国神社とともに奉献先として山階宮家が選ばれました。

これは、海軍航空隊に所属し、「空の宮様」と呼ばれた山階宮武彦王が、農民思いの宮様であるというエピソードに感激した女子青年会員たちの発案だったといえます。昭和十七年(一九四二)三月に市田国民学校で開かれた時局講演会で、講師に招かれた民間航空者で大日本報国義会長の竹崎武泰が話したもので、「農民思いの宮様は畑仕事から帰る農民を車に乗せて自宅まで送った」という内容もあったそうです。

山階宮家だけでなく、他の年には、山本英輔海軍大将の亡母の墓前や久邇官家、一條公爵家にも市田柿が献上されています。



“空の宮様”と呼ばれた山階宮武彦王

年表 —市田柿に関する主なことから—

1943	1948	中国から渋柿が伝来	献上(1944、1945にも奉獻)
1929	1955年頃	飯田・下伊那地域で渋柿が栽培され、串柿の加工が行われる	県立農業試験場下伊那分場で市田柿の硫黄蒸気の調査、試験が始まる(1951年まで)
1926	1960年頃	松岡氏が、現在の高森町市田に松岡城築城	飯田市三種地区で立石柿に代わり市田柿の栽培加工がさかんになる 硫黄蒸気法が普及
1924	1957	大坂冬の陣の際に知久則直が各武将へ串柿を贈る	セロハン袋を使った出荷形態に統一される
1923	1965	飯田城主脇坂安元が柿改を行う	飯田・下伊那地域で生産される干柿のブランド名を「市田柿」に統一
1921	1968	立石柿が「將軍の歯堅め」の儀式に用いられ、年末の風物詩として江戸で人気に	北原利雄がモーター駆動の柿むき機を開発
1907年頃	1969	伊勢屋敷で寺子屋を開き、焼柿を村内に広めた児島礼順死去	松川町、豊丘村、農業試験場下伊那分場の市田柿6樹が優良母樹に指定される
1895	1973	伊那郡立農業試験場開設(1903年廃止)	出荷形態がセロハン袋150gから200gへ増量される
1857	1975	上沼正雄が寺山の斜面を開墾し焼柿の苗木を植える	県立農業試験場下伊那分場移転
文化年間	1982	焼柿から市田柿へ改称を申請	樹園地栽培が定着し、品質向上、生産量増加につながる
1838	1985年頃	上沼正雄、橋都正農夫、酒井安らが下市田区社年回とともに、市田柿を東京、名古屋、大阪の各市場へ初出荷	11月上旬の長雨により青カビが大量に発生
元文年間	1989	宮沢熊太郎が飯田市三種地区へ市田柿を植える	火力乾燥法や消毒法の改良、大型の柿ハウス導入などがすすみ、飯田・下伊那地域が日本有数の干柿産地に成長
1656	1994	長野県柿品種調査展覧会開催。市田村の3人が出品した柿が優良品種に選ばれる	市田柿専用の全自動柿むき機「ムッキー」が開発され、広く普及
1614	1999	長野県立農業試験場伊那分場開設	高森町で「柿を使った料理コンテスト」開催
1614	2001	世界大恐慌。養蚕業が衰退し、果樹栽培への転換が進む	すべての加工食品に品質保持期限表示が義務付けられ、シーラー機を使った密封包装へ移行
1614	2004	戦争中、女子青年会代表が晴国神社、明治神宮、山階宮家へ市田柿を	市田柿の衛生管理マニュアルを策定、導入
1614	2006		特許庁の地域ブランドに「市田柿」が認定される
1614	2007		高森町に「市田柿の由来研究委員会」発足
1614	2008		市田柿ブランド推進協議会設立
1614			高森町歴史民俗資料館で特別展「市田柿発祥の里」と時の駅講座「市田柿を生んだ処と人との時代」開催
1614			8月に下伊那郡北部を中心に降雹。落果などの被害が出る

参考文献(五十音順)

市田柿 武田彦左衛門著／柿の文化誌—柿物語— 岡田勉著 南信州新聞社出版局発行／郷土の特産
市田柿 現状と発展を求めて 関東農政局長野統計情報事務所飯田出張所編 長野農林統計協会発行／
くだもの品種名鑑 長野県うまいくだもの推進本部編・発行／原色日本の美術 第4巻 正倉院 土井弘著 小
学館発行／下伊那史／下伊那の特殊産業 信濃教育会下伊那部会編 山村書院発行／下伊那分場史—
天竜川の流れを友に50年 長野県農業総合試験場・南信地方試験場編 南信地方試験場拡充強化期成
同盟会、南信地方試験場同窓会発行／信州伊奈郡郷村鑑 本堂順一編纂 山村書院発行／高森町史上
巻・下巻／高森町果樹のあゆみ六十年 『高森町果樹のあゆみ六十年』刊行委員会編・発行／高森南小
学校沿革史／地域文化No.58 2001秋 (財)八十二文化財団発行／長野県果樹発達史／長野県史／長
野県農業総合試験場 南信地方試験場報告 第1号「市田柿の優良系統の選抜並びに干柿の品質向上に
関する研究」／長野県の園芸 日本園芸会長長野県支会編・発行／日本食品干蔵科学会誌 第34巻第4号
「カキタンニン(Ⅳ)カキタンニンの健康機能性を活かした柿の新商品開発」平井俊次／萩山のさと 下市田
史談会編／平成20年度柿研修会「柿の栄養・健康機能」平井俊次／本朝食鑑 第2巻 島田勇雄訳 平凡
社発行／三穂村史／みるよむまなぶ飯田・下伊那の歴史 飯田市歴史研究所編 飯田市発行

協力者一覧(五十音順、敬称略)

飯田市美術博物館、飯田市歴史研究所、石原忠正、市田農産、市瀬辰春、伊奈川義公、春日敏、割烹葵、
上沼君平、上沼長彦、唐沢哲男、北原利雄、木村祐三、宮内庁正倉院事務所、倉沢秀司、光澤喜人、後沢
清子、後沢ちはみ、小林誠二、小林製袋産業株式会社、酒井紀男、佐々木春子、佐々木弘子、JAみなみ信
州、塩澤正人、喬木村歴史民俗資料館、高森町歴史民俗資料館、竹内昭一、塚平耕一郎、塚平増男、天
竜産業株式会社、豊橋市二川宿本陣資料館、中塚博明、中塚泰臣、長野県下伊那地方事務所農政課、
長野県下伊那農業改良普及センター、長野県南信農業試験場、中村まさ子、庭村一男、橋都正、羽生清彦、
羽生宏敬、林登美人、平井俊次、福沢利幸、福島光三郎、船橋徹郎、北条達美、前澤健、松田正好、三石
俊彦、宮坂武男、宮沢勉、宮沢政司、宮沢充利、村松好文、本島洋二、山内尚己、山岸富次郎、山岸宗利、
山岸行雄、吉川恭子、吉沢栄、立石寺

市田柿の由来研究委員会

平成18年、市田柿が地域ブランドに登録されたことをうけ、郷土史家、柿生産者、町職員らをメンバーとし
て発足。「市田柿発祥の里」として、学術的・郷土史的見地からの市田柿の価値や存在感を高めていくこ
とを目的に活動。

会長：北沢富夫 副会長：今川博司、原次郎

委員：加藤忠彦、小島福夫、佐々木昌、佐々木順一、手塚勝昭、橋都栄一、羽生義雄、松島高根、山田幹男
特別委員：JAみなみ信州高森支所、高森町商工会

事務局：高森町役場総務課町づくり振興係 清水栄

制作：株式会社エージェンシー広宣 取材・編集：高橋聡子 イラスト：今村由男 印刷・製本：ユニオン印刷株式会社

本書の一部または全部の無断複写・転載等は禁じられています。©ichidagaki no yurai kenkyu iinkai 2009 print 製本費